

2) 事業2 ふれあい支援活動

学校適応指導教室の不登校児童生徒に対する「ふれあい活動」

(編集及び文責 責任教官 豊嶋 秋彦)

1.事業2の概要

1) 目的と方法

4年目となる不登校児童生徒とのふれあい活動は、不登校児童生徒の通級施設である弘前市学校適応指導教室が実施している適応指導活動に、日常活動と各種体験活動の双方の支援者として参加することを通して、二つの目的を達成することを目指す。

児童生徒の学校適応や発達がどのような関わりによってもたらされるのか、逆に、どのような関わりが学校適応と発達にとって阻害要因なるのかを、長期の継続的支援の中からつかみだしてもらいたい。これは、短期の「ふれあい」によっては達成できるはずのものではないし、適応的な子供たちと表層レベルの関わりをいくら続けても気づきえないものである。ちなみに、さまざまなきっかけで学校場面から退避的となり、学校側・教師側の「教育的・教師的」働きかけも奏功しなかった結果、不登校となった子どもたちに対する日常的継続的な支援こそ、フレンドシップ事業のねらいである「子どもの気持ちや行動の理解」と「実践的な指導力」を最も根底的に形成させると我々は確信している。

教職志望学生の、対人関係職に向けた成長と発達。教師は、学習やその他の学校の課題を教示・指導する存在である以前に、ユーザーである児童生徒の心とふれあい、支援していく対人関係職である。学校という社会的場と学校での対人関係を巡る葛藤や退避的心性を抱える不登校児童生徒との関わり、それを媒介とした他の支援学生と適応指導教室指導員との関わりを通して、対人関係職としての成長と発達を促す。

この目的を達成する一助として、心理臨床・教育臨床専門家のスーパーバイズによる事例研究会を2回組み込んだほか、今年度から新たに、適応指導教室指導員を助言・指導者とする月例及び集中の「研修および事例検討」を適応指導教室側が独自開催した。

一年間の取り組みの概要は表1の通りである。なお、このほかに、適応指導教室独自事業として「ふれあい自然体験」(北津軽郡十三湖の散策)、「自然ふれあい宿泊体験合宿」(県梵珠少年自然の家;所在 五所川原市)、および、社会体験が行われたが、これにも、多くの派遣学生がボランティアとして参加していることを付言しておく。

表1. 平成13年度「不登校児童生徒とのふれあい活動」の概要

期	間：平成13年4月～平成14年3月(支援活動は4月下旬から原則週1日)
場	所：弘前市教育研究所付設「弘前市学校適応指導教室」

支援対象者：適応指導教室に通級する児童生徒 20名～30名（通級者数は変動）

参加(派遣)者：教育学部3・4年次学生 17名

特別派遣者：教育学研究科学校教育専修教育心理学分野修士課程2年生 1名

活動内容：

1. 適応指導教室における通常の適応指導の支援

期間中の全指導日。毎日数名の学生がローテーションで適応支援に当たる。

2. 「ふれあい自然体験 - 十和田湖散策 - 」の支援

場所 十和田湖

日時 平成13年6月20日 8:50～17:00

支援内容 散策しながらの交流

参加者

児童生徒（希望者） 10名

保護者 1名

支援学生、大学院生 15名

弘前市学校適応指導教室指導員等 5名

事業担当教官 2名

3. 体験学習の支援

場所 北津軽郡板柳村「板柳ふるさとセンター」

日時 平成13年10月9日 8:50～15:20

支援内容 アップルファイバー煎餅作り

リンゴ木灰を釉薬とする湯呑みの下絵つけ

調理学習 ほか

参加者

児童生徒（希望者） 12名

支援学生、大学院生 13名

弘前市教育研究所職員 2名

弘前市学校適応指導教室指導員等 5名

事業担当教官 2名

4. 事例研究会への参加

4-1. 適応指導教室による研修会・事例研究会への参加

6月から、適応指導教室指導員と派遣学生の合同による、月例及び集中の研修会・事例検

討会が開催された。

4-2. 臨床心理士、適応指導専門相談員のスーパーバイズによる事例研究会への参加

第1回 平成13年12月11日 13時30分～16時

プレゼンター 弘前市学校適応指導教室指導員

スーパーバイザー 教育学部附属教育実践総合センター教授

臨床心理士 豊嶋 秋彦

討論者 教育学部附属教育実践総合センター長 羽賀 敏雄

第2回（予定 平成14年3月）

午前 スーパーバイザーによる適応指導状況の観察

午後 事例および適応指導体制の検討

プレゼンター 弘前市学校適応指導教室指導員

スーパーバイザー 盛岡市教育委員会「ひろばモリーオ」

適応指導専門指導員 立原 聖子

弘前大学教育学部心理学科教室助教授

臨床心理士 花屋 道子

教育学部附属教育実践総合センター教授

臨床心理士 豊嶋 秋彦

討論者 教育学部附属教育実践総合センター長 羽賀 敏雄

2) 参加学生の募集と選抜

昨年度1年間を通して支援活動を行った16名中10名は、4年次学生であり今春卒業した。残る6名の内、カリキュラムの関係で継続的な支援ができない2名を除く4名の今年度4年次学生が、2年目の支援を希望した。また、一昨年1年間の支援を行った後、海外留学して復学した学生も参加を希望した。この5名は積極的な支援実績を持つので、全員2年目の支援を許可した。今年度の派遣可能上限は、適応指導教室との折衝の結果、最終的に、学生17名、研究も担当する特別派遣者（心理学分野修士課程2年生、昨年度から継続。学部時代の支援から通算4年目の支援となる）1名となったので、新規に12名の派遣学生を募ることとなった。

例年通り、主に小学校教員養成課程の3年次学生を対象にした中学校教員免許取得のための教職科目「生徒指導 A」（前期科目）講義の第一回目（4月13日）に、本事業に新たな参加希望学生を募ったところ41名が応募し、4月10日に、この事業の担当責任教官による面接とエゴグラムを実施して、新たに、4年次女子2名、3年次女子7名、3年次男子3名の計12を選抜した。選抜基準は昨年度と同様、「エゴグラムが自他肯定型で、かつA（アダルト）得点が高い者であること」としたが、今年度は、いわゆる「健全なパターン」への近接度を数値化して得点の高い者から12名を採用した。昨年度は男子学生の応募が全くなかったのであるが、今年度は3名が派遣されることとなった。これは、従来、感度が鈍かった男子学生に、漸く不登校支援への関心が高まってきたことを示すであろう。

派遣者の最終的な決定は4月19日である。4月23日、17名に対して学部側のオリエンテーションを実施し、翌24日には、新たに派遣される12名に対する適応指導教室側からの第1回目ガイダンスが実施され、可能な日から原則毎週1日以上支援活動に入っていた。ただし、派遣2年目以上の学生は適応指導教室の新学期開始と同時に、支援活動を展開した。

3) 参加学生の研修と事例研究会

新たに参加した学生も、2年次で「生徒指導」を履修済みであり、生徒指導や教育相談の基礎知識は習得していたが、適応指導教室に派遣中も「生徒指導 A」の講義を全回受講させた。そこでは、問題行動の一般的経過と意味、不登校論、共感的カウンセリングの理論及び実習という三つのテーマを詳細に展開した。「不登校児童生徒とのふれあいをしながらの受講であるので、リアリティーを感じながら受講でき、活用もできた」との報告があった。さらに希望者は、本事業の責任担当教官が開講している「社会心理学（教師のリーダーシップ）」（前期科目）と「問題行動の心理（不登校の心理学）」（後期科目）や、心理学科の臨床心理士教官が開講する「カウンセリング」（後期科目）を受講し

ながら、適応指導教室に通った。これら3科目はすべて心理学科専門科目である。

さらに、教育学部教官の参加する事例研究会を2回を組んだ。第1回は12月、本学部の臨床心理士である教官がスーパーバイザーとなり、適応指導教室が理解あるいは指導に困難を感じていた2名の生徒について、教室側から事例提供をしてもらい、指導員や指導主事、参加学生からも、エピソードと捉え方を発表してもらったのち、スーパービジョンを行う形式で実施した。

第2回は、3月上旬、次のようにスーパーバイザーの陣容を強化して実施する予定である。

青森県教育委員会が設置する適応指導教室「こころの教育相談センター」指導員として4年間の指導実績をもち、その間、本事業の特別支援者や事例研究会講師もつとめた盛岡市教育委員会適応指導教室「ひろばモリーオ」専門指導員と、スクールカウンセラー歴も、不登校児童生徒と保護者、担任教師に対する心理面接歴も長い、本学部の臨床心理士教官から、適応指導の状況を観察してもらった上で、適応指導の体制と事例について、コメントしていただく。

なお、適応指導教室の側から、教室の理念と指導内容、通級児童生徒の全般的状態に関するガイダンスがあった点は、従来と同じであるが、これに加えて、6月から、適応指導教室指導員による学生対象の研修・事例検討会が実施されるようになった。その一環として、夏期休業中の学習会も5回組まれた。日時は、7月25・27・30日、8月20・21日である。



板柳ふるさとセンターで炊事体験

2.参加学生の気づきと変容

ここでは、12月時点で、「フレンドシップ事業参加体験による自分の変化・成長を自己分析する」という課題で学生に提出させたレポートから、支援2年目の者から1名、1年目の者から2名を抜き出して紹介する。なお、レポートは「自分の支援体験に照らして、変化・成長の段階をよくとらえている」という規準で、支援1年目の参加学生に選ばせたものである。掲載順に、この事業による学生の変化・成長は深いものになっている。

1) 派遣1年目の学生のレポート

小学校教員養成課程(教科の某教室所属) 3年 匿名

「不登校」という言葉は、フレンドシップ事業に参加する前から一応知ってはいた。しかし、私は、中学時代学校へ行っていたし、まわりにもいなかった。ニュースでは「不登校」の子供が急増しているというが、実感が沸かなかつたし、特に気にも留めていなかった。他人事のような気持ちさえあった。昔からボランティアに興味があり、弘大フレンドシップ事業がよい機会だと思って、何気なく参加の希望を出した。この事業に参加し、適応指導教室に通って私が変わった最も大きいことは、子供達に対する姿勢だ。

私が適応指導教室に通って最初の頃は、ただ子供達と遊んだり、話したりすればよいと思っていた。しかし、4月から子供達と一緒に活動していく中で、子供達1人1人が実に

多様であることを実感できた。友達が欲しくてくる子供、ふれあいを求めてくる子供、学習の場を求めてくる子供...、様々であった。また、月ごとの報告会や事例研究会をするうちに、子供達の状況や抱えている問題について少しだけ知る事ができた。子供達には、“心の休まる居場所”が必要なのに、軽い気持ちだった自分が情けなくなった。その後、真剣に取り組むことができた。私は大学生であり、専門家ではない。専門的なカウンセリングなどはできないけど、子供達にとってよい「お兄さん」となり、話したりする、それだけでも子供達が少しでも前向きになってくれれば、自分の事のようにうれしくなった。これは、私にとっては、大きな変化であり、経験できたということはよい収穫となった。

教師を目指す私にとって、この経験は将来必ず役立つと思う。また、適応指導教室の対応、先生方の工夫などあらゆる面で勉強にもなった。“学校不適應”について少しでも多く様々なことを経験したいし、勉強したい。来年も自分なりに頑張りたいし、できることなら4年次でも参加したいと思う。

编者によるコメント

フレンドシップ事業「一般」への入り方の典型である。所属教室名と氏名は、编者の判断で伏せることとした。「ただ子供達と遊んだり、話したりすればよいのか」という当初の姿勢は、不登校に対するネガティブな先入観を持って支援を開始する学生が多いのとは好対照の、いわば「自然体」の入り方ではあるが、他のフレンドシップ事業はいざしらず、学校教育の危機をもたらしている不登校に対する認識の甘さが際だつ。しかしこのような甘さが現場の教師から払拭できていない現実を、编者はこれまでの学校体験、臨床体験で痛感してきたので、この学生のみを責めるわけにはいきまい。むしろ、不登校生徒との実際の交流に、適応指導教室側が設定した研修・事例検討会で得た一般的知識・児童生徒個人情報とが噛みあって、「心の居場所」の必要性を実感できたこと、子どもの変化を我が事のように感じられるようになったことは、教職志望学生にとっては大きな成長であり、多くの学生で支援1年目前半に生じる変化の一つである。このレポートを本報告書掲載用に選択した学生にも共通部分があったのであり、それ故にこそ、このレポートが選択されたのである。

小学校教員養成課程（英語学科教室所属）3年 三浦 健太郎

現在、一般的に不登校という言葉は本当にネガティブなニュアンスしか持ち合わせてはいない。実際に、私自身、適応指導教室に行く前は、私が今までに接してきた中学生とは全く異質の子供達を想像していた。しかし、適応指導教室の子供達は、私が接してきた中学生とあまり変わりのない、とても素直で恥ずかしがり屋の、ただの中学生だった。これから不登校の中学生と接していくのだ。と緊張していた私は、安心するとともに、この子供達とは不登校の子供としてではなく、一人の中学生、ひいては一人の人間として接していくことが重要なことなのかもしれないと感じた。そして、私自身、飾らない一人の人間としてみんなと接していこうと決めた。

適応指導教室にいくにつれて、みんなのことが少しずつみえてきた。そして、私は本当に彼らの素直さや、真面目さを感じる事ができた。そんな彼らと接していると、あるひとつの気持ちがうまれた。ここにいる子達も、学校に行っている子達も、そして私達でさえも、傷ついた一人の人間ではないのだろうか。ということである。

私自身、不安や孤独を感じる時はどんなときだろうか。失敗したり、一人ぼっちになったり、友達を傷つけてしまったりと、たくさんある。誰だって、みんな不安や孤独といった感情はもちあわせているのだと思う。特に中学時代の子供は、非常に多感で、この

ような感情にも敏感であるだろう。ましてや、適応指導教室の子供達は、学校に行くのが当然のことに思われている社会において、さらに不安を感じているだろうし、感じやすくなっているのだと思う。

そんな不安や孤独を感じる時、誰にとっても非常に重要なことは、近くに誰かがいることなのだと思う。親でもいい、兄弟、姉妹でもいい。もちろん友達でも恋人でもかまわない。誰か悩みを打ち明けることが出来る人。励ましてくれる人。そのような人がいてくれることが、本当に大切なのだ。一人でいたら、不安や孤独につぶされそうになってしまう。どんな中学生だって、不安や孤独を感じたときに一人だったら、やりきれない思いになるだろう。学校に行きたくないって思うかもしれない。誰だって一人でいたら、本当に弱いものだと思う。私自身、本当にそうなのだから。

それが不登校の子供達へ、適応指導教室という場がある一つの理由だと思う。先ほども述べたが、不登校の子供は不安や孤独を感じやすいと思う。そんな時、適応指導教室に来れば、誰かがいる。子供達にとっては私はその誰かになりたい。そして、互いに絆を深め合うことで、私にとっても不安や孤独な気持ちを和らげてくれる、誰かを見つけないかと思う。私はこの適応指導教室にきて、改めて、人間と人間のつながりの重要性や、どんな状態の子でも、一人の人間としてみるのが大事なのだと感じた。

その他にも、適応指導教室ではたくさんのことがあったし、感じる事ができた。しかし、本当に大事なことは、先ほどまで述べてきたことだと私は思う。

编者によるコメント

不登校児童生徒に対するネガティブなイメージが、実際にふれあう中で「明るい不登校」という逆のイメージに修正されるのは、よくある。しかしこの学生は、そのような皮相な認知転換に終わるのではなく、「普通の中学生」との基本的同質性を見取るとともに、背後の孤独感やさびしさをも感知できている。そして、孤独感やさびしさを抱えた生徒を、いわば生身の、ひとりの人間として支えるという方向性を発見していく。今後は、孤独感やさびしさの更に背景にある葛藤への感受性と、孤独感やさびしさを溶く具体的な技法の発見とが鍵になるであろう。

小学校教員養成課程（心理学科教室所属）3年 吉田 美智子

数ヶ月間、適応指導教室での支援をしてわかったことを具体的なエピソードを混じえて述べたいと思う。通い始めた当初、私は中学3年生の女子Aとの関わりが多かった。その為、自分なりの勝手な解釈から「Aさんは受験を控えているので、ここは勉強中心に支援したほうがこの子にとって良いのではないか」と思い、勉強について少し強く「今日はここまでやってみようか？」という姿勢で接していた。最初は、素直にに応じていたものの、そのうち教科書さえ開かないようになり、私は“このままではいけない”と焦りはじめた。Aさんには「吉田さん、なんか先生みたーい。そんなんじゃ、学校の先生になったとき嫌われるよ」と言われた。自分ではそんなつもりはなかったのに“先生的な接し方をしていたのか？”とショックを覚えた。また教師適な関わりだとしても、子供達に嫌われてしまうような接し方をしていたのか、と思うと意気消沈してしまった。そうしている内に自分はこの教室で、どのように子供達と関われば良いのかを考えるようになっていった。加えて教室での自分の立場が曖昧な為、複雑な心境であった。関わりとして、教師的なものであると子供達はこちらを避けてしまう。そうかと言って“全く勉強しないのもAにとって良いものなのかどうか...？”と悩んだ。それと並行して悩んだことは、“自分を出すかどうか”である。最初は週に1度の関わりだから、さらっとしたもので良いと思い込んでいた。しかし、週を重ねるにつれ、それだけでは苦しくなり対応できなくなってきた。子供達の視点が鋭敏で、返答に困ってしまうものもあったからである。例えば、将来のことな

どが挙げられる。子供達は自分の将来を考えるにあたり、私達学生の将来について興味を持ち、尋ねてくるのが度々あった。別に嘘をついているわけではないのだが、返答していてどんどん苦しくなり、“これ以上のことを子供に話していいのだろうか？”と悩んだりした。一時は本当に悩んで、通うことが苦痛であった。

教室に通い始めて数ヶ月経た後、今までの関わりから一転して“いつもの自分で勝負しよう”と心を入れ替えた。その時の心的過程は以下である。慣れない空間での活動に自分自身が疲れ、また降り返ってみると、子供達を特別視していた部分もあった。具体的に述べると、ここに通級している子供達は弱者なのだから“傷つけないように”と常に思っていて、“話すこと”に対しても言葉の先々まで気を使うことがあった。しかし、数ヶ月間活動を共にして以下のことを悟った瞬間、悩んでいたことに関してふっきれたような気がしたのである。

“確かに彼、彼女らは他の子供達と比較すると個性的な面や自己主張が強いが、他の子供と変わらない部分も大きい”

私は普通の子供達と変わらないところにも目を向けて働きかけていきたいと思ったのである。そして、教師的な関わりをやめ、普段の自分で接し始めた。しばらく後、こちら側から無理に働きかけなくても子供達の方からいろいろな事を話してくれるようになった。やはり、通級している子供達に“教師的な関わり”は良くなかったのだと改めて気付いた。

またその他に見えてきたことといえば、子供達のすべてを良しとしてはいけないということである。適応教室には様々な子供が通っているのだが、ある子供Bは少々身勝手なところがあり、他の子供から嫌がられていた。支援している学生はほとんど注意出来ない状態が続いていたのだが、ある時女子生徒側が怒ってしまった。「だめなものは、きちんと注意しないとだめなんだよ。弘大生はみんな注意しないんだから...。弘大生は年上なんだから、注意した方がいい。」と言われた。その時私は子供達の力だけに委せるという受動的な態度ではいけないのだと知った。自分にはギクシャクするのが嫌な部分があったため抱えている問題を避けようとする傾向があったのだが、時にはきちんと子供の間に入って分別ある行動を促すということも大切な支援なのだ気付かされた。

数ヶ月を通じてわかったことをまとめると以下である。教師的な関わりでは子供達に通じないこと、また自分を出さなければ活動しにくいこと、そしてただ支援するのではなく、きちんと教えるべきことは伝え、注意を促すこと、である。冬休み後の残り数ヶ月間子供達の行動や気持ちをケースごとにおさえながらしっかりと勉強しつつ、関わっていきいたいと思う。

编者によるコメント

派遣1年目で既に、対人関係職としての望ましい変容を遂げていく人に典型的な変容過程（詳細は、シンポジウム記録の豊嶋発表を参照のこと）を辿っている。「きちんと教えるべきことは伝え、注意を促す」という直面化・対決を、生徒の内面的な感情の受け留め（*アセプト*）と併用していくことができるようになると、理想的な対人関係職に成長していくことが期待できる。

2) 派遣2年目の学生のレポ - ト

小学校教員養成課程（心理学科教室所属）4年 田中 未央

適応指導教室に派遣されてから、早いもので1年と10ヶ月経つ。基本的に週1回の支

援なので、決して十分な関わりができていないし、私が行かない曜日の彼らの様子は見る機会がない。「もっと彼らと関わる回数を増やせば見えてくるものの質も量も豊かになるだろうな」「そうすればもっと計画的・効果的な声かけや支援ができるんじゃないかな」という思いは常にあるが、その中で感じたこと・考えたこと・見えてきたことは経験に伴って確かにある。

適応指導教室に通う児童生徒に、共通すると思われることはいくつかある。その1つに、「高校進学への意欲」が挙げられる。

“中学校に復帰するつもりはないが高校へは進学したい”と考えている生徒が圧倒的に多い。中2生と中3生では勉強に対する意識の違い・向かい方の違いはあるものの、みんな高校に対してはプラスのイメージを持っている（現在中1はいない）。中2の段階では、ほとんどの生徒が「今からやってもどうせ忘れるってー！」「今日は眠いからやる気しない。」などと言って、友達や学生とのオシャベリに励むことが多いし、勉強は出来ることならやりたくない。（もしかしたら、中2で適応指導教室に通い始める生徒が多いということを見ると、勉強そのものが嫌いというより、仲の良い友達と繋がっていることの方が今の本人にとって大事だからかもしれない。）そんな彼らでも、高校についての話題には必ずといっていいほど乗ってくる。「高校って楽しいでしょ？」「私の頭だったらまあ高校くらいかなー。」など、高校進学に対するイメージはそれぞれ持っているようだ。中3生になると、大抵の生徒は学生や先生のアドバイスも聞きながら一緒に机に向かうようになる。一年前は遊んでばかりだった生徒でも、自分の意志でおのずと勉強するようになってくる。家庭教師をつけたり問題集を買ったりして、来春の自分についての具体的なイメージを持ち、自分なりの歩みで合格できるように一生懸命頑張っている。

ここで興味深いことは、「同年代の人は苦手」「みんなと一緒にになにかやるのは苦手」と言って集団行動に抵抗を示す生徒でも、一度失敗している“学校”という枠組みの中にもう一度帰ろうとすることである。“学校”はまさに同年代の人達が、一緒に勉強したり様々な活動をしたりする場所である。高校は義務教育でもないし、行きたくなければ行く必要はない。それでも行きたいと願うのは周りからの圧力以上に、学校でうまくやれる自分にもどりたい・本当は学校に行きたいと本人自身が願っているからではないか。それならば、適応指導教室を離れたあとの学校生活できちんと適応できる能力が、適応指導教室での獲得すべきこととなろう。卒業の時期を迎えたからハイさようならではなくて、ある程度責任を持って対人能力を身につけられるような支援もしたいと思う。勉強面も大切だがそれ以上に、自分は友達がきちんと作れる有能な存在なんだという自信を持たせ、かつ実際に集団の中で人間関係をうまく築くことができる能力を身につけさせることが必要なのではないか。高校に合格すること・中学校に戻ることは二次的な目標で、他者との関わりの中で必要な力を身につけられることが適応指導教室の目指すところなのではないか。私達学生も児童生徒の状態を見ながら、近い将来を見据えて集団生活ということ意識した支援を、もう少し積極的にしていく必要があるのではないかと感じた。

そしてもう1つ共通すると私が思うことは、「体育が出来るようになればその子は元気になる」ということである。もっと限定していうと、「体育館に来られただけで効果はある」ということである。これは去年から感じていたことだったが、今年はその印象をますます強めた。活動性が低下し個室にこもって出てこれない子が、教室に行く前の第一歩として体育館に来ることが多い。例えば、去年は図書室と個室を往復していた中2女子の場合もそうである。今年初めに遠慮がちに体育館をのぞきにくるということがあった。大きな体育館の端っこに申し訳なさそうに座り、目を離すといなくなったりするのだが、「体育館に行かない？」と指そうとすんなり来たりする。初めはただ黙って見ているだけでも、それまでは顔を合わせることのなかった仲間が、楽しそうにバトミントンやバレーをやっているのを見ているだけで緊張感も和らいだのだろう、笑顔が見られた。“笑う”ということは相手に対しての警戒心が取り払われたサインであろう。2回3回と誘ううちに体育だけには毎回顔を出すようになり、まずは学生と一緒にプレーできるように

なった。中学校ではバトミントン部だったこともあり、その腕前は見ていたみんなに認められた。今ではすっかり元気になり、狭いコートの中で4対4で対決をしたりと、仲間と工夫して楽しんでいる。また最近では中3男子も体育館に初めて来た。声も聞いたことがないし、顔もはっきり見たことがなかった彼だが、先日の体育では先生と一緒にバトミントンをしていて、攻撃的で無配慮に打って思いっきりシャトルを飛ばしたが、それを必死で追う先生に時折笑顔を見せた。それでいいのだと私は思った。体を動かすことはなによりストレス発散になるし、仲間と同じ空間にいたことができた・先生と非言語のコミュニケーションができたということで、この出来事は彼にとってプラスの経験になったと思われる。案の定、次週も彼はやってきて、その日は先生・生徒のペアを組んでダブルスをやるほどの進歩を見せた。今なお個室にこもっている状態の彼だが、今後どのように変わっていくのがとても楽しみである。体育の時間は教室とは違った、物理的にも精神的にも開放的な空間を提供し、普段の固定した友達の枠を越えて活動しやすいことから、新しく仲間に入ったり仲間を増やしたりする絶好のチャンスになる。その意味では調理実習や社会見学も同じような効果が期待できると思うので、積極的に参加するよう児童生徒には声をかけている。(編者註 この後、適応指導教室の在り方に対する提言が論述されているが、本報告書の目的からそれるので、割愛した。)

適応指導教室は、不登校児童生徒が元気を取り戻して社会生活に戻るための画期的で素晴らしい事業であり、その事業に参加できることを私は誇りに思っている。今年度も残りわずかだが、これからも適応指導教室がより良く発展できる限り協力したい。

編者によるコメント

昨年度のシンポジウムで発表した学生のレポートである。2年に近い支援体験の中で、不登校児童生徒の動機づけ要因を探り出し、さらに卒業後の適応までを見越した具体的な提言を行っている点が出色である。特に対人能力(対人的スキル)の教育は、臨床専門家の配置されている先進的な指導教室では既に実施されていることであるが、その必要性を支援体験から実感的に抽出している。